

新規育苗箱施用剤インピルフルキサム剤の イネ紋枯病防除効果

インピルフルキサム剤の特徴

○ 紋枯病に対して実用的な防除効果
(詳しくは裏面へ)

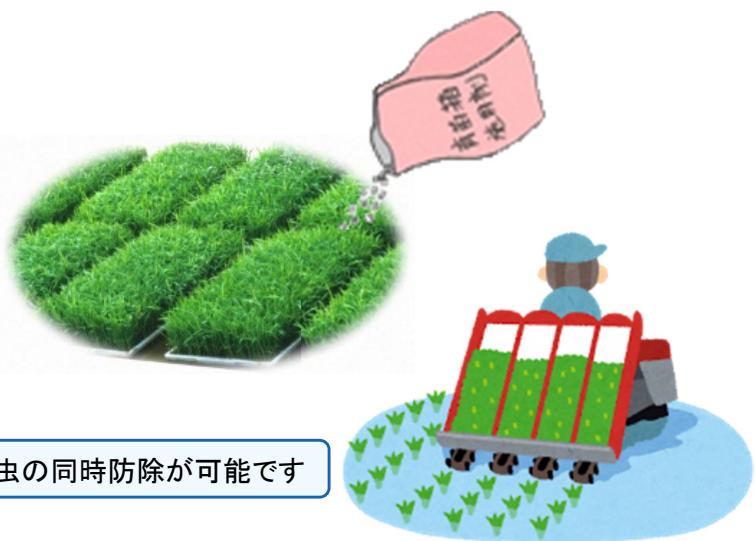
○ 新規のSDHI剤(コハク酸脱水素酵素阻害剤)

○ 播種時覆土前処理が可能

[薬剤例(2025年1月22日 現在)]

・稻大将箱粒剤 両剤ともいもち病、初中期害虫の同時防除が可能です

・スタウトアレスモンガレス箱粒剤 等



イネ紋枯病



【病斑】

温暖化により発生
ほ場増加傾向！



【収穫期の被害】
(収量に影響)

農薬の使用は処理方法・処理量を守って、安全に！！

インピルフルキサム剤と比較して同等～やや劣るが、実用的な防除効果

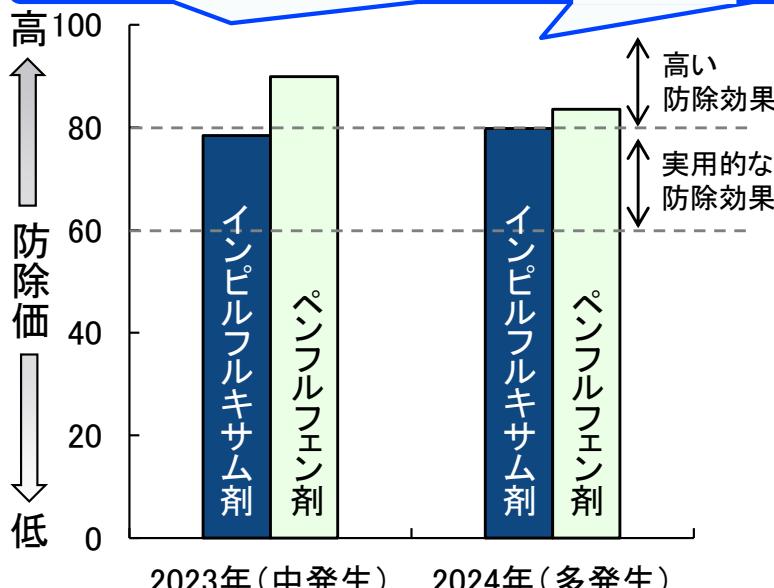


図1. インピルフルキサム剤のイネ紋枯病防除効果

【試験概要(図1および図2共通)】

[供試薬剤]

インピルフルキサム剤: スタウアレスモンガレス箱粒剤

ペンフルフェン剤: ヨーバルパワーEV箱粒剤

[処理方法] 播種時覆土前に育苗箱施用(50g/箱)

[試験場所] 鳥取市橋本(鳥取県農業試験場)

[栽培概要(2023年)]

品種: ‘きぬむすめ’

移植: 5月24日(稚苗機械移植、19箱/10a)

出穂期: 8月14日

発病調査方法: 発病株の有無および最上位病斑高を調査

[栽培概要(2024年)]

移植: 5月22日(稚苗機械移植、20箱/10a)

出穂期: 8月14日

※その他は2023年と同様

[防除率]

全体の被害度より算出

[調査日]

2023年: 9月14日(出穂31日後)、2024年: 9月12日(出穂29日後)

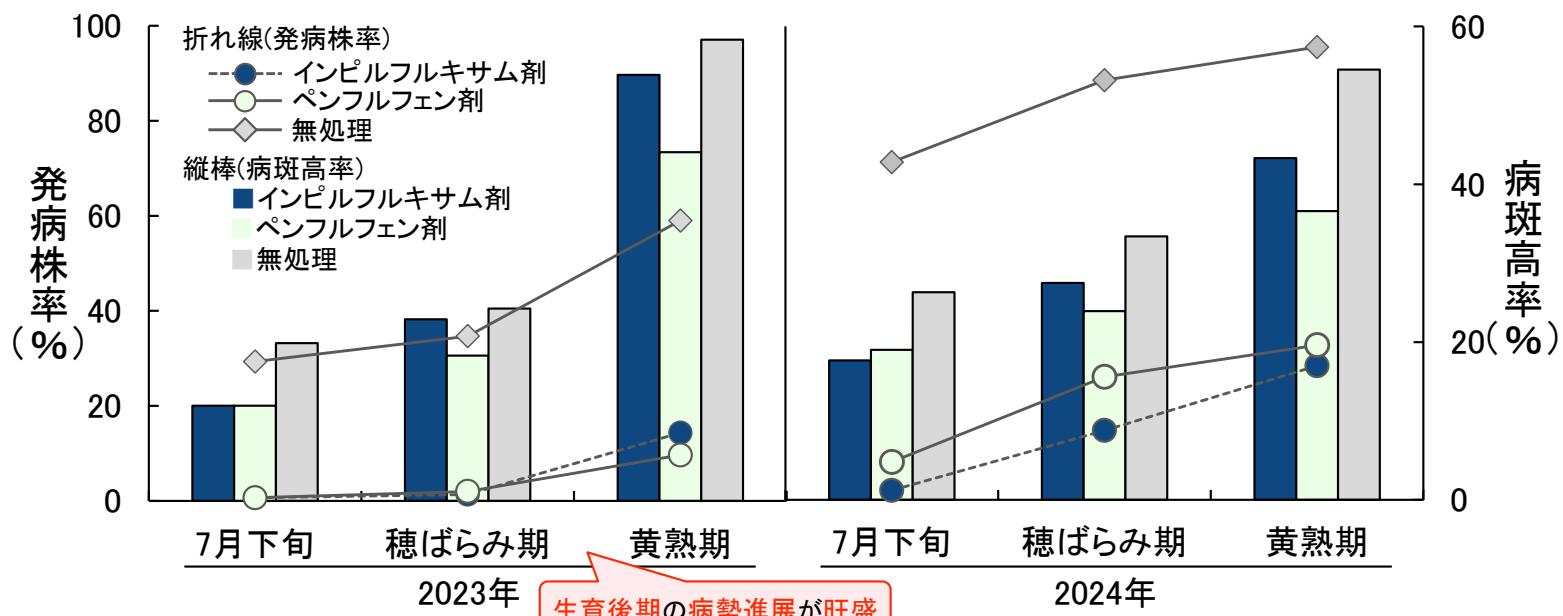


図2. イネ紋枯病の発病株率と病斑高率の推移

[調査日(2023年)]

7月下旬: 7月24日(移植61日後)、穂ばらみ期: 8月9日(出穂5日前)、黄熟期: 9月14日(出穂31日後)

[調査日(2024年)]

7月下旬: 7月24日(移植63日後)、穂ばらみ期: 8月13日(出穂1日前)、成熟期: 9月12日(出穂29日後)

利用上の留意点

- 本情報の対象は、鳥取県内の水田です
- 薬剤によって対象病害虫が異なるため、栽培地域に適した薬剤を選択しましょう
- 基本的には育苗箱施用剤のみで紋枯病の防除が可能ですが、必要に応じて追加防除を行いましょう
- 薬剤は規定量を均一に散布しましょう(薬剤の防除効果に影響します)
- 極端な疎植は避けましょう(植付箱数が少ない場合、薬剤の防除効果に影響します)